'83 11/24

東海インタビュー

半世紀目の脱皮へ

学校法人河合塾理事長
河合 斌人（あやと）さん（65）

文化・国際性で肉づけ

——河合塾は、ことしが五十周年。名古屋生まれながら、東京で一貫して教育事業に打ち込んできたプロのわざです。つねに新しいものを模索しながら、全国の予備校のトップを行く急成長ぶりです。その秘けつを一つ。

河合氏 「合格成績」がすばらしい、の一語につきます。しかし、これらも未来へ目を向けての企画なんですよ。

——しかし、証券会社から予備校へ。〝華麗な転身〟などともいわれていますが、戸惑いは。

河合氏 戸惑いどころか、二十年間の海外体験で日本人には従来の教育のワク外にもう一つ重要なものがあると、痛感しました。それは、ポスチャー、フッと立ち止まって全体を見渡し調整する心です。モーレツ型だけでは、もう通用しない。だが、受験戦争そのものが悪いわけではありません。競争は、民主主義社会の基本原理。いわば、受験は〝必要悪〟ですな。公教育がタテマエなら、予備校はホンネの教育。日本の教育は、この二重構造です。われわれは、受験生にいい意味での人生の一里塚を乗り越えるチャレンジ精神を教えているわけです。

——そのホンネの教育が行きつくところは。

河合氏 さきに、記念事業で「私の出会ったすばらしい先生」というテーマの作文を一般公募したんです。おもしろいことには「すばらしい先生」とは「親身になって世話をしてくれた先生」ということで一致してるんです。え、発達、ニューメディアの時代になっても、ロボットに教育してもらうわけにはいかんと…。

河合氏 たしかに、受験戦争をあおるのは、よろしくないが、新しい文化をクリエートすることも重要ですな。新たに造形センターのようなものを造って地域に貢献できるかも、大きな問題です。国際性には、政治的にも、経済的にもその要求が強まっており、教育が先行していかなければならない問題です。

——その国際性について、この地域は最近〝国際化〟に熱心です。地域の文化性、国際性の現状にひとこと。

河合氏 反発をくうので、批判は差し控えたい。文化的には古い貴重なものがあるが、新しい文化をクリエートすることも重要ですな。新たに造形センターのようなものを造って地域に貢献できるかも、大きな問題です。国際性には、政治的にも、経済的にもその要求が強まっており、教育が先行していかなければならない問題です。この地域は開発のうえで、受け入れのポテンシャルにあふれる魅力ある素材ですよ。

×　×　×

旧制愛知一中、名古屋高商、東京商大を経て、日本興業銀行入行。ロンドン首席駐在員から山一証券に移り、副社長を退任後の五十六年、河合塾主、ことし六月、理事長を兼務。談論風発の国際人。

（編集委員・近藤智雄）

河合塾 創立者は、旧制五高、八高、名高商で英文学を教えた故・河合逸治氏で、斌人氏はその長男。前理事長は、次弟の邦人氏（故人）。現在、河合塾グループは、予備校十二校を中心に専門学校を含め全国十八校、生徒数三万八千人。来年四月には、名古屋情報処理専門学校を開設予定。

トリデです。だが、一方で情報化社会や、企業の合理化が進み、それが老齢化社会と重なるという社会的状況が出てくる。雇用にどうかかわってくるのかも、大きな問題です。こういう社会のニーズに応えるため、バーティカル（垂直な）には、英才教育を、零歳児にまで引き下げ、ホリゾンタル（水平な）には、六十歳定年者の再就職コースにまで、バリエーションを広げていく。それに、文化性、国際性を肉づけしたゆりカゴから墓場までの総合教育機関を目ざします。

語学会話学校の拡充や、東南アジアからの留学施設を造ることなどで応えたい。ともかく、文化性でも、国際性でも、

この人に

この人に